

山梨県北柱市

史跡 谷戸城跡Ⅶ

平成16年度 環境整備事業に伴う発掘調査概報

2005・3

北柱市教育委員会

例言

- 1 本書は平成16年度に実施された史跡谷戸城跡の環境整備事業に伴う発掘調査の概報である。
- 2 本調査は文化庁及び山梨県の補助金を受けて北杜市教育委員会が実施した。
- 3 本調査の期間は平成16年11月19日～平成16年12月24日までで、調査面積は160㎡を測る。
- 4 本書の編集は渡邊が行った。執筆は第1～4章を渡邊が、その他は文頭に記した。
- 5 発掘調査及び本書の作成に当たっては次の諸氏・諸機関のご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。
秋山 敬、出月洋文、小野正文、十森駿武、谷口一夫、田畑貞寿、新津 健、萩原三雄、本中 真、八巻與志夫、吉岡弘樹（五十音順、敬称略）
文化庁、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県立考古博物館
- 6 本調査の諸記録、出土品は全て大泉歴史民俗資料館(旧大泉村歴史民俗資料館)に保管してある。

目次

第1章	北杜市域の中世遺跡	2
第2章	平成16年度事業の概要	4
第3章	本年度の調査成果	9
第4章	谷戸城周辺遺跡の調査成果	12
第5章	平成16年度谷戸城周辺 地中探査レーダー調査報告	18





第1図 史跡谷戸城跡位置図 (S=1/50,000)

第1章 北杜市域の中世遺跡

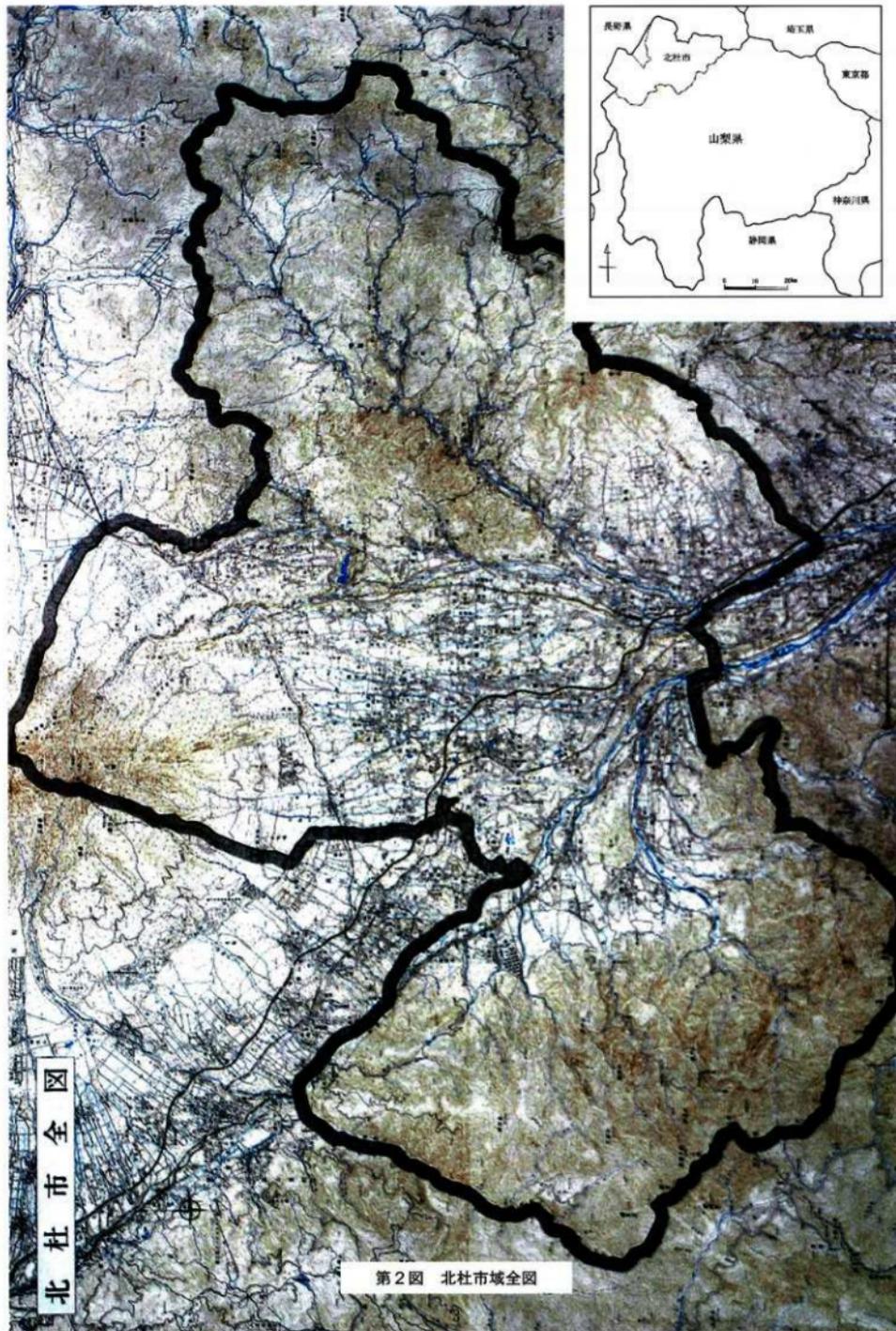
平成16年11月1日の町村合併により、大泉村は周辺6町村（須玉町・明野村・高根町・長坂町・武川村・白州町）とともに北杜市となった（第2図）。地理的には八ヶ岳南麓の台地上に位置する旧大泉村・長坂町・高根町域、塩川左岸の旧須玉町・明野村域、釜無川右岸の旧武川村・白州町域に分けられる。

この7町村が含まれていた旧北巨摩郡下は、県内でも中世遺跡の分布が濃い地域であり、谷戸城の歴史に深く関わる初期の甲斐源氏の伝承も多い。特に須玉町若神子には新羅三郎義光・義清親子（逸見清光の祖父・父）の居城であったとの伝承が残る若神子城があり、その周辺にも義光伝承のある寺社が多く残っている。『甲斐国志』と『須玉町史』から義光・義清の開基、祈願所等であったとの伝承のある寺社を拾い出すと諏訪明神、三輪明神、陽谷山正覚寺、久柴山妙円寺、湯沢山長泉寺（いずれも若神子）、津金山海岸寺（津金）、金滝山信光寺（東向）、白龍山徳泉寺（比志、ここまで須玉町）、八幡宮（上黒沢）、孤月山浄光寺（蔵原、ここまで高根町）となる。これからも若神子地区に集中する傾向がみてとれる。しかし、義光は甲斐守に就いたとの記載が系図にみられるだけで、実際に役職に就き、甲斐国に入国した形跡は認められないという。義清にしても、清光の暴行が原因で常陸国から甲斐国に配流になった先は市河荘であり、市川大門町平塩岡と昭和町義清神社に館跡であったとの伝承が残っていることから、本拠は市河荘内にあったと考えられる。須玉町史では若神子城を、物資の集積地として発達したこの地域を掌握するために築かれた城と捉え、築城したのは逸見荘を押さえていた勢力を想定している。義光の伝承は山梨県内に散在すると考えられるが、若神子のように集中的に伝承地が残る例はないのではなからうか。反対に義清の伝承が残る地域は前の2ヶ所を含む旧市河荘域と北杜市域に絞られると考えられる。今までみてきたように、両者ともそれほど北杜市域の歴史に関わってきたとは思えないが、なぜこのような伝承地の分布になったのかについてはまだ検討すべき点は多く興味深い。

一方、逸見清光はというと、谷戸城の他には源太ヶ城跡（須玉町津金）、中尾屋跡（須玉町小倉）、中丸の旧壘（長坂町中丸）、建岡神社、朝陽山清光寺（ともに長坂町大八田）、逸見神社（大泉町谷戸）が挙げられる。中尾屋跡は清光の時代のもの、という伝承で直接関係するものではないが、寺社は少なくなり、城や土壘といった実戦的な施設が増えている。また、分布としては須玉町と長坂町大八田を含む谷戸城周辺に集まるといえる。清光の嫡男光長は逸見太郎光長と表記されるため、父である清光の本拠を受け継いだと考えられているが、系図の中には小蔵（＝ここえ）太郎と表記するものがある。小蔵とは現須玉町小倉であり、初期甲斐源氏の伝承地が依然として須玉町に残る。これには逸見荘が深く関わるものと考えられる。逸見荘は建長5年（1253）の近衛家所領目録が初見であるが、立荘は平安時代にまでさかのぼると想定されている。在地領主は逸見の地名を姓にした逸見氏を考えるのが妥当であろうが、清光が甲斐国に配流される大治5年（1130）以前は誰が領主であったのかははっきりしない。その荘域は、古文書の中に現れる地名から長坂町、高根町、明野町に広がっていたことがわかっており、隣接する須玉町、大泉町も含まれていたと考えられる。逸見氏は、清光のもう一人の嫡男武田太郎信義の子四郎有義が系図に逸見有義と表記されたり、光長以後の系図が数代で途絶えていることから、清光—光長と続いた逸見氏の嫡流は残らなかったと考えられている。しかし、15世紀には須玉町江草を本拠とする今井氏が逸見を称するようになり、この逸見氏に関わる伝承地が須玉町に存在することも確かだ、これらが誤って伝えられた可能性もあるだろう。

『吾妻鑑』に出てくる「逸見山」について『甲斐国志』は若神子にあった館のことであろうと推測し、谷戸城はその要害と記述している。若神子の繁栄ぶりはこの地域を考える上で無視できないものであったのだろう。北杜市域に残る伝承地は初期甲斐源氏の動向を探るうえで非常に大きな手がかりとなるが、これらを地域の歴史にどのように結び付けていくかが今後の課題である。

※ 秋山 敬「大泉村とその周辺の歴史的環境」『史跡谷戸城跡Ⅳ』を参照した。



北 杜 市 全 図

第 2 図 北 杜 市 域 全 図

第2章

平成16年度事業の概要

平成16年度は、史跡谷戸城跡保存整備事業に伴う発掘調査の7年目に当たり、整備工事の4年目となる。

発掘調査は昨年度までで面的な発掘を終了しており、今年度は整備工事のための補足的な調査を帯郭・二の郭・南斜面にて行った。発掘によって出土した炭化材は、科学分析により城跡の年代を特定する資料としている。

整備工事は、二の郭の土壁・空堀の復元的整備工事として保護盛土・除木工を、南側の山裾の崩落部分復旧として土のう設置・除木工を行った。

ガイダンス施設建設工事は今年度で建築が終了し、来年度以降に展示工事に取り掛かる予定となっている。

埋蔵文化財緊急発掘調査事業としては、城域の範囲を確認する目的で城跡周辺の道路を地中探査レーダーにより調査した。

普及活動として、16年10月まで大泉村広報誌上で『甞る谷戸城跡』と題した連載を行った。

史跡谷戸城跡調査保存整備委員会抄録

平成16年度には、史跡谷戸城跡調査保存整備委員会を1回、同専門委員会を4回開催した。

平成16年6月7日 第19回史跡谷戸城跡調査保存整備委員会

平成15年度の発掘調査成果、城内整備工事の報告。平成16年度の城内整備工事計画（二の郭休憩施設、除木）、谷戸城ふるさと歴史館建設工事計画について説明。

平成16年6月7日 平成16年度第1回専門委員会

平成16年度発掘調査計画・整備工事実施設計（二の郭空堀の整備方法）の検討。谷戸城ふるさと歴史館展示内容（展示構成、紹介遺跡、展示スペースの割り振り、映像ソフト）の検討。

平成16年7月26日 平成16年度第2回専門委員会

整備工事実施設計（空堀の整備方法と範囲、城内排水、南斜面の復旧方法）、谷戸城ふるさと歴史館（映像展示機器、館の運営）の検討。

平成16年9月9日 平成16年度第3回専門委員会

整備工事実施設計（空堀の整備方法）、谷戸城ふるさと歴史館展示内容（エントランスホール、オリエンテーションホール、映像展示室、第2・第3展示室）の検討。

平成16年11月29日 平成16年度第4回専門委員会

整備工事実施設計（土壁・空堀の整備方法、南斜面復旧工事の現地指導）、谷戸城ふるさと歴史館展示内容（導入展示）の検討

平成16年度 谷戸城整備工事

今年度は二の郭の土壁・空堀及び南側山裾崩落部分を整備対象とした(第3図)。工事対象範囲の合計面積は約2,200㎡である。主な工事は盛土による土壁の復元的整備・掘削による空堀の復元的整備・除木工・法面復旧である(第4～6図)。

土壁と空堀の復元的な整備は、空堀内の埋戻し層を残すこと、現況の土壁の高さの違いを整備後も反映させることを基本的な考えとした。

埋戻し層はこれまでの発掘調査で確認されていたもので、空堀のほぼ中位をローム土で人為的に埋めているものである。当初は空堀内を通路として利用するための整地層と考えられていたが、埋戻しが雑であり、場所によって層が確認できないところもあることから、廃城時に土壁を壊して埋めたもの、との判断がなされた。文化庁との協議のなかで、埋戻し層も人為的な遺構であるので後世に残すべき、との指導があった



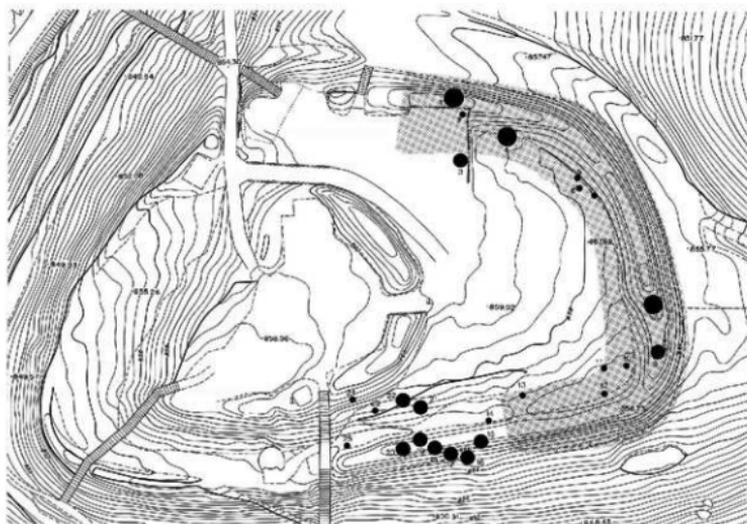
第3図 史跡谷戸城跡整備工事範囲(網掛け部分)

め、整備後の空堀底部は埋戻し層より上に設定することとなった。

土壁の形状は発掘調査成果と遺構保護のための盛土厚をもとに標準的な断面形を決めた（第5図）。頂上の幅180cm、勾配45°、土壁頂上から空堀底面までの深さは北～東（第5図 Na.9）が約3m、南側（同 Na.12）は約1.5mが基本的な形状であるが、現場でその地点ごとに軽微な調整を行っている。南側の比高差が小さいのは、前述のとおり元の地形に則ったものである。

また、二の郭の北側と南側では虎口形状と空堀本来の深さを見せるため、北側では空堀を渡るための土橋（空堀を掘り残したもの）の両側15mずつを、南側も幅広い虎口を中心に両側15mずつを深く掘り下げる予定で、今年度は北側の一部（同 Na.1）に着手した。この部分では、整備後の土壁頂部と空堀底面で最大4.1mの比高差があり、発掘調査で確認された比高差とほぼ同じ比高差となっている。

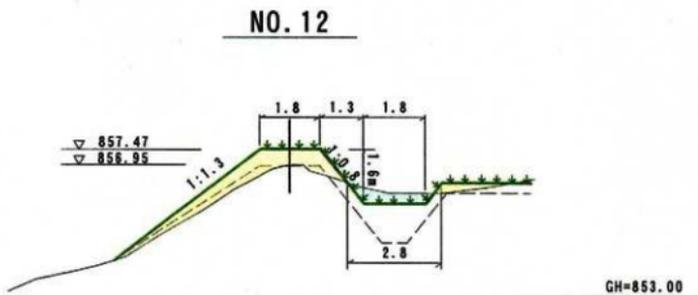
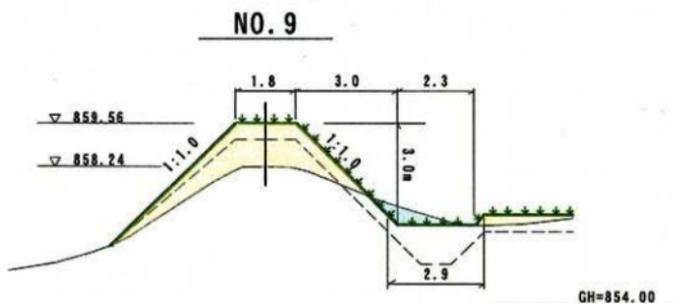
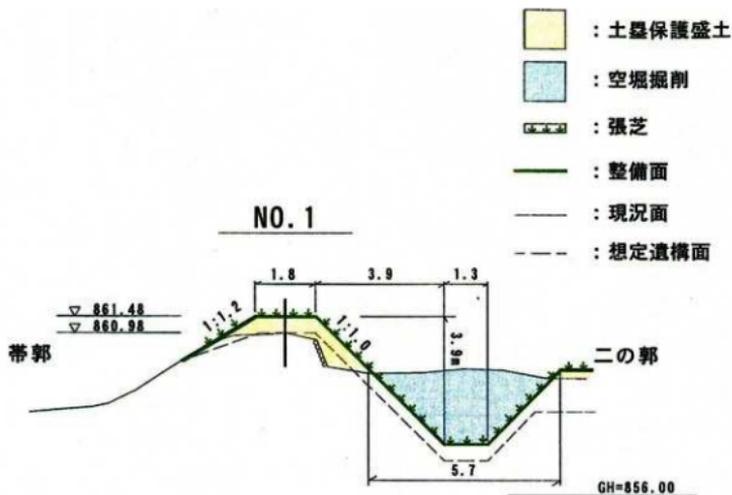
工事は高さ10～20cmの土留め柵を設置した後、よく締め固まるように生石灰を混ぜた土を盛って復元的に土壁の形状を整えた。表面に張る芝に石灰の影響が出ることを防ぐため、さらにその上に10cmの厚さで普通の土を盛り、芝を張っている。空堀は人力にて掘削・整形を行い、その上に芝を張った。現況の空堀は底



第4図 二の郭工事範囲(網掛け部分)と樹木配置

番号	樹種	幹周り(cm)	番号	樹種	幹周り(cm)	番号	樹種	幹周り(cm)
1	ヒノキ	250	10	サクラ	70	18	マツ	150
2	コブシ	70	11	サクラ	70	19	マツ	190
3	コブシ	140	12	サクラ	80	20	マツ	130
4	モミ	205	13	サクラ	90	21	マツ	160
5	サクラ	70	14	サクラ	80	22	マツ	150
6	サクラ	85	15	マツ	160	23	サクラ	80
7	サクラ	80	16	マツ	140	24	サクラ	70
8	ヒノキ	215	17	マツ	120	25	サクラ	60
9	モミ	185						

第1表 二の郭除木対象樹木リスト



第5図 二の郭土塁・空堀整備断面図(S=1/150)

部の標高が北から南にかけて低くなっており、完了した場合の空堀の底面もそれに則ったものと考えられるため、整備後も北から南に一定勾配で傾斜させて、これに沿って雨水の排水を行うようにした。これまでも、空堀内に水が溜まったことはなかったので、空堀内に排水路を設けることはせず、自然浸透による排水とした。

除木はこの郭で25本、南斜面で32本の合計57本を対象とした(第4・6図、第1・2表)。全体の7割以上をマツ、サクラが占め、いずれも戦後に植樹されたものである。作業は樹木をクレーンで吊りながら行い、切り倒すことはしなかった。遺構への影響が大きいため基本的に抜根はしなかったが、空堀内のものは整備に支障をきたすため人力で抜根した。

南斜面崩落部の復旧は崩落土を除去後、地面を10cmの厚さですき取り生石灰を散布して地盤を固めた。その上にフトンゴ(基本形は長さ200cm、幅120cm、高さ50cm)を崩落部の形状に合わせて階段状に10段積み上げ、これを土のうで覆った。表面には、平成12年度に行った現生植生調査で確認されている植物のうち4種(ヨモギ、ヤマハギ、コマツナギ、イタドリ)の種子を入れた植生土のうを用い、これらの種子が根付いた後も現在の植生に影響のないように注意を払った。



第6図 南側山裾工事範囲(網掛け部分)と樹木配置

番号	樹種	幹周り(cm)	番号	樹種	幹周り(cm)	番号	樹種	幹周り(cm)
1	サクラ	65	12	サクラ	40	23	マツ	195
2	マツ	175	13	サクラ	60	24	クヌギ	120
3	サクラ	40	14	サクラ	95	25	マツ	95
4	マツ	75	15	クヌギ	125	26	マツ	120
5	マツ	70	16	クヌギ	120	27	マツ	140
6	マツ	45	17	ケヤキ	300	28	マツ	80
7	サクラ	50	18	サクラ	70	29	マツ	80
8	マツ	75	19	サクラ	50	30	ナラ類	135
9	マツ	100	20	マツ	80	31	ナラ類	80
10	クヌギ	120	21	クヌギ	245	32	サクラ	115
11	サクラ	70	22	サクラ	80			

第2表 南側山裾除木対象樹木リスト

第3章 本年度の調査成果

本年度は二の郭、帯郭、南斜面を調査対象とし、合計10のトレンチを設定した。調査方法はこれまでと同しく、公共系座標に則った4×4mのトレンチを基本とし、調査データが必要な箇所にトレンチを配した。

二の郭忠魂堂跡（第7図・写真1・2）

平成12年度に移転した忠魂堂（戦没者の慰霊施設）は、二の郭北側の土壁裾に盛土を行って建設されていた。整備工事のときにはこの盛土を除去しなければならないため、事前にその厚さを確認する目的で調査を行った。盛土東側は盛土と現地表面との高低差が大きく、石垣を積んで盛土の流失を防いでいる。

調査の結果、70～80cmの厚さで盛土されていることが確認され、表土近くには地盤強化のためかローム土が盛られていた。ローム土下の黒褐色土層のなかには多くの土器片が含まれていたことから、城内の土をここへ集めて盛った可能性がある。忠魂堂が建設される前の表土面と考えられる薄い黒色土層の下20cmで炭化米のようなものが小さい塊で出土した。

石垣東側のトレンチでは、表土下30cmでローム面が確認されたが、重機による攪乱跡等が見られ、遺存状態は悪かった。



写真1 二の郭盛土除去部分(左)と地山検出状況(右)

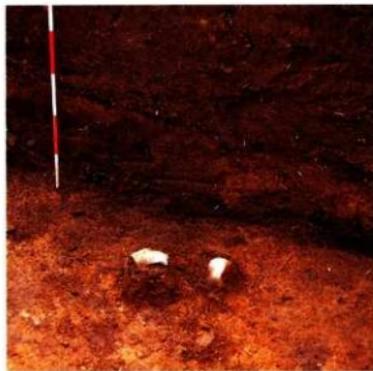
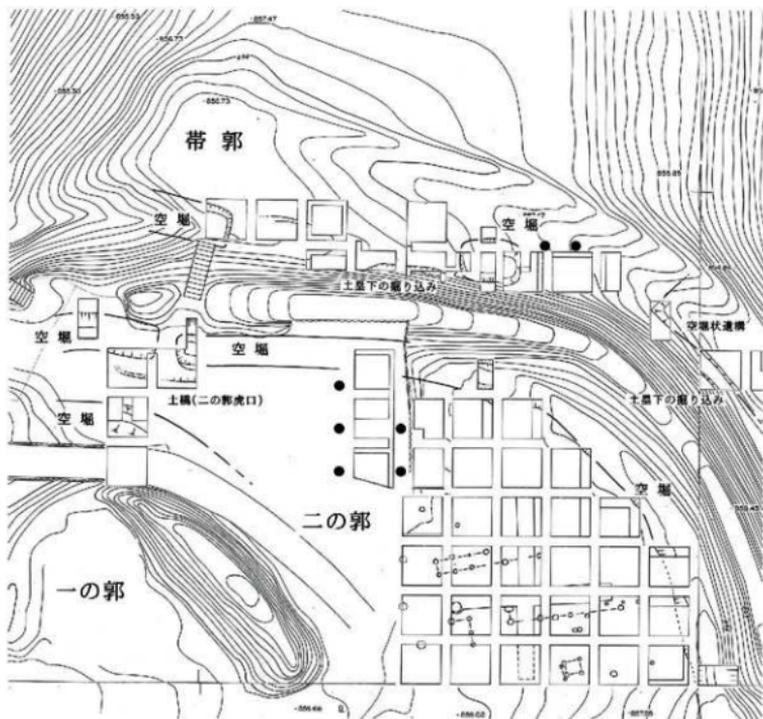


写真2 炭化物出土状況

帯郭（第7図・写真3～6）

平成11年度の調査で掘り始めの部分を確認した空堀（史跡谷戸城跡Ⅱ参照）は、その規模を確認するためこれまでに何度か調査を行ってきたが発見されず、当初の予想より小規模のものと考えられてきた。今回の調査により、長さ6m程度の空堀であることが確認された。このような小規模な空堀の例は同じ帯郭内いくつかあるが（史跡谷戸城跡Ⅱ・V参照）、いずれも空堀といえるほど深くはなく、内側（二の郭側）をしっかりと掘りこむのに対して外側はなだらかに上がっていく片栗研のような断面形をしているものばかりであった。しかし、この堀は逆台形の断面形をもち、深さも現地表面から150cmと深く、二の郭内側の空堀と同じ形状である。また、現地表面から50cm下で埋め戻された層が見つまっている点も共通することから、二の郭内側の空堀と同時期に機能していた空堀と判断した。このような小規模な空堀が帯郭に掘られた理由については、掘削中に何らかの理由で放棄された可能性も含めて検討しなければならない。



第7図 調査区概略図(●の付いているトレンチが今年度調査 S=1/500)



写真3 帯郭空堀検出状況(南から)



写真4 帯郭空堀近景(北から)



写真5 帯郭空掘 縦・横断面



写真6 帯郭空掘 断面

南斜面（第8図・写真7・8）

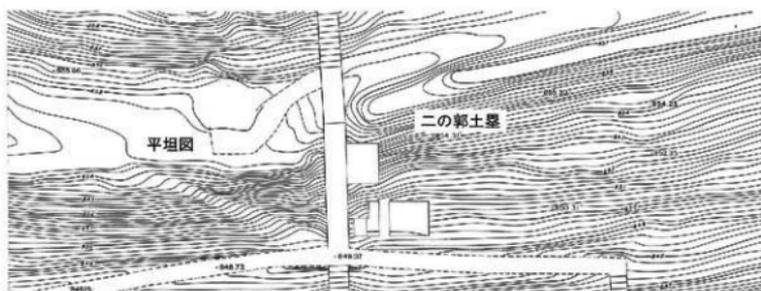
昨年に引き続いての調査で、二・三の郭からその下の現在園路となっている帯郭状の平坦面までの間の調査である。距離は約15m、比高差5mの斜面で、これを登りきったところは二の郭（東側）を囲む土壁と、三の郭（西側）を囲む土壁が切れて南へ張り出した平坦面がぶつかる場所で、噴い違い虎口のような形態をしている。この斜面をどのように登って噴い違い虎口へ進入するかを確認するため調査を行ったが、斜面には粘土が風化したような土が堆積しており、道らしく踏み固められた部分や平らに削られている部分が確認されず、通路を確定することができなかった。



写真7 南斜面調査状況



写真8 郭状平坦面検出状況



第8図 南斜面調査区概略図 S=1/500

第4章

谷戸城周辺遺跡の調査成果

旧大泉村では各年度に地中探査レーダー調査と並行して谷戸城周辺の発掘調査も行ってきた(第10図)。これは城の範囲確認を主な目的としたもので、城内の発掘調査方法と同じく公共系座標に沿って4m×4mのトレンチを配置して調査を行っている。ここでは各年度の調査結果についてまとめた。

平成10年度(第9図、写真9~13)

調査の目的は、谷戸城北側駐車場の北に東西方向で痕跡を残す堀跡の検出であり、現在確認できる痕跡を西へ延長すると調査区と重なる。当初、堀跡は東西方向に1本だけと考えていたが、調査の結果から東西方向に延びるものと、その途中から南へ分岐するものの2本存在することが確認された。

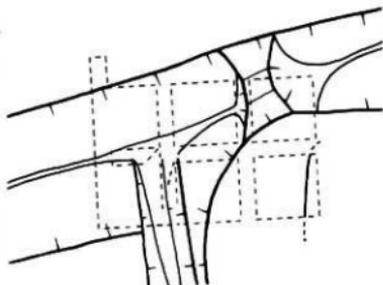
東西方向の堀は断面形が築研状を呈する空堀で、上幅は推定で800~900cm、底幅は110cm、現地表面からの深さは最深で320cm、勾配は最もきついで40°を測る。後世、浅く幅広に掘り直されているが、その時期は東西・南北両方の堀の機能停止後と考えられる。築研堀は北東トレンチで高く掘り残された部分により分断されるようで、城内二の郭北側の虎口と同じ構造といえる。空堀の中を橋のように掘り残して渡ることができるようにしたもので、ここが城の出入口と考えられる。

南北方向の堀は、ローム面を追っていくと堀の東法面が築研堀と同じような緩い傾斜を保っているのに対し、西法面は急傾斜で落ちている。土層観察からは、東法面に土がある程度堆積した後、西法面と同じような急傾斜で掘り込まれた形跡が認められたことから、空堀が掘り直されたものと判断した。断面の形からは箱堀とすることができよう。後世の掘り直しの際に上部は削られているが、確認できる上幅は330cm、底幅は110cm、現地表面からの深さは220cm、勾配は50~60°を測る。また、縦断面(南北方向)の観察からは、箱堀を掘り込んだ痕跡は認められなかった。これらのことから、東西の築研堀と同時に南北にも堀が掘られたが、それからほとんど時間を経ずに、何らかの理由により南北方向の空堀だけ掘り直しが必要なほど埋まってしまったため箱堀を掘り直したという経過が考えられる。そして、箱堀の西側には築研堀の法面の跡が見られないことから、最初の掘削時には西側が急角度、東側が緩い角度の法面を持つ、片築研に近い断面形であったと推測される。

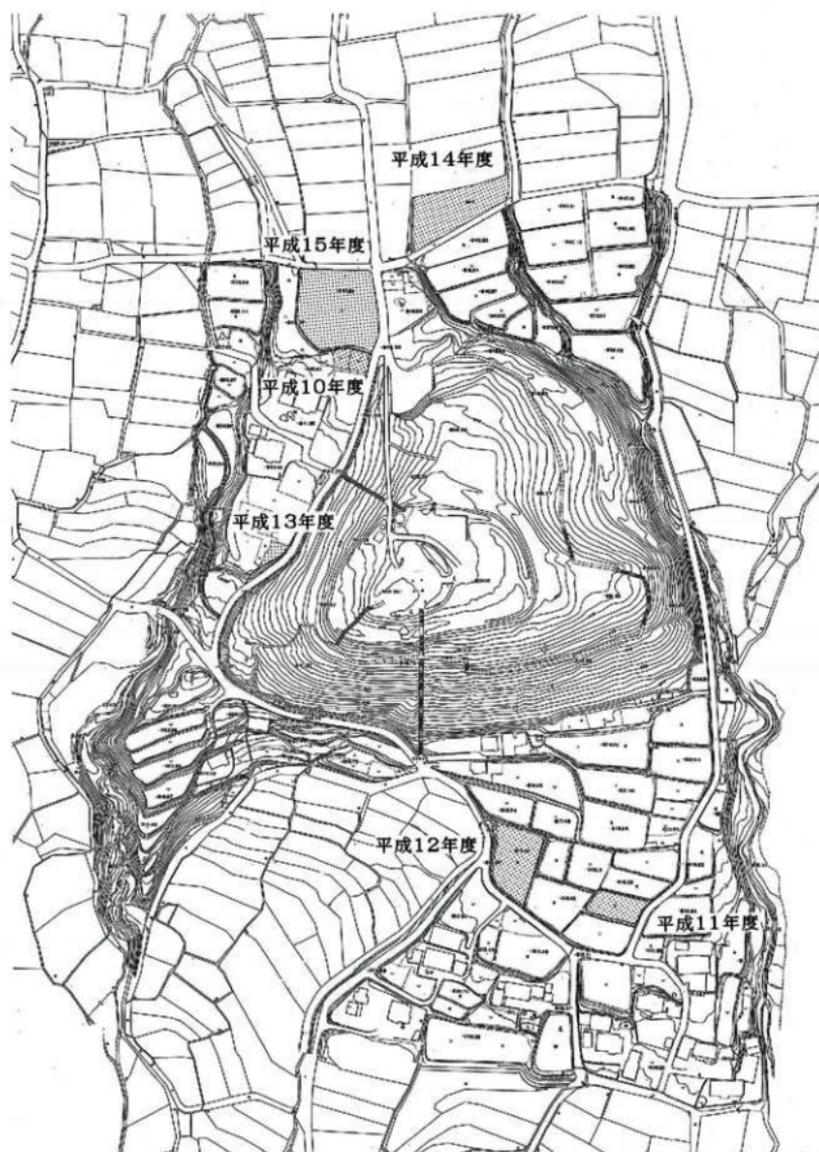
遺物は堀底近くから内耳土器の耳の部分が出土している。



写真9 平成10年度調査区全景(上が北)



第9図 平成10年度調査区模式図



第10図 谷戸城周辺遺跡 各年度調査地点



写真10 兼研堀断面



写真11 北東トレンチ 空堀掘り残し部分(東から)

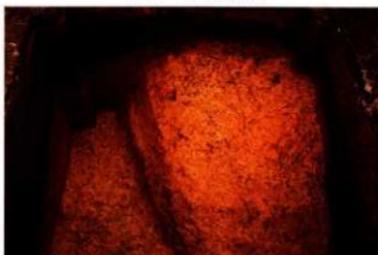


写真12 箱堀(左)と兼研堀(右)



写真13 箱堀断面

平成11年度（写真14・15）

城の南に広がる田地に、調査トレンチを東西方向に3つ配置して調査を行った。地形は北から南へ傾斜しており、段状に水田が造られている。

調査の結果、平安時代の住居跡1軒、溝（水路跡か）2条、土坑1基を確認した。住居跡は西トレンチで確認されたが、大部分はトレンチの外に及び、遺物の特徴から9世紀後半の時期と考えられる。

溝は東西に並ぶ3つのトレンチ全てで確認された。隣接して2本存在し、いずれも北東から南西方向に水の流れがあったと考えられる。北側のものは大量の砂と石で埋まっているが、南側のものは底に人頭大の石が集中し、その上に黒色土と黄褐色土が堆積している。南側のほうが新しいと考えられ、流されてきた縄文土器の破片が多く出土している。



写真14 平成11年度調査区全景(東から)



写真15 溝検出状況

平成12年度（写真16～20）

城の南に広がる田地の調査を行い、平安時代の竪穴住居跡2軒、溝跡4条、地下式土塋1基を確認した。

住居跡は調査区の南端に位置し、2軒が重複している。東側の1号住居跡は出土した土師器の特徴から9世紀後半の時期と考えられる。西側の2号住居跡は後世の破壊が著しく、遺物も乏しいため不明な点が多い。

地下式土塋は地中探査の結果から存在することはわかっていたが、調査日数も限られていたため竪坑の位置だけ記録するのにとどめることとしていた。しかし、埋め戻し作業中に陥没したため最低限の調査を行った。竪坑は径70cmの円形で、中に閉塞石が認められた。主体部は長軸175cm、短軸150cmの略長方形で、軸は北東—南西方向にある。竪坑は主体部の南西隅に接続するかたちとなっている。



写真16 平成12年度調査区全景(左が北)



写真17 地下式土塋(竪坑)

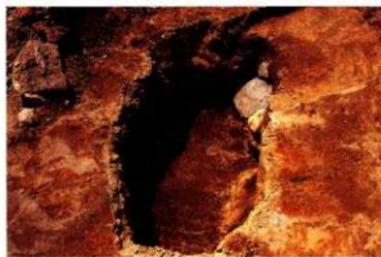


写真18 地下式土塋



写真19 1号溝(西から)



写真20 4号溝

4条の溝跡(北から1～4号溝)はいずれも東西の方向に確認され、西側が深く底に石が集まる点で共通する。これらの溝のあり方から、元地形は東から西へ傾斜していたと考えられる。1・4号溝は断面V字形のしっかりしたものであるが、ほとんどは田普請のため埋められているのに対し、2・3号溝は非常に浅く、機能停止

後に埋められている。導水や排水に関する施設を想定しているが、1・4号溝については他の可能性も検討する必要がある。

平成13年度

六の郭南の一部を調査した。六の郭は谷戸城西側の山裾に接する平地で、史跡指定地外ではあるが面積は郭の中で最も大きい。現在は名地や畑地となっているが、この中を通るクランク状の道の存在からも何らかの施設があったものと推測される。

調査は2つのトレンチで行い、ローム層上の黒色土中から集石らしき遺構1基を確認した。出土遺物は縄文時代と近世以降のものに限られ、谷戸城に關係する遺構・遺物の出土はなかった。

平成14年度（写真21～23）

中山間地域総合整備事業の一環として、谷戸城北側で公園整備を行うこととなり調査を実施した。平成10年度に調査した空堀より北側（城の外側）となる。

谷戸城の北側は北から南へ下る幅の広い谷地形で、現在は農地となっている。今回の調査区の西隣の畑では地下式土塙が確認されているほか、谷戸城の西脇から北へ延びる道路は途中でクランク状に曲がっている。

当初は、前述の平成10年度に調査した空堀のさらに外側を囲む空堀の存在を想定したが、遺構は何も確認されなかった。堆積している土の様子からは、川ほど恒常的ではないにしろ水の流れのあったことが推測され、谷が埋まっていったものと考えられる。中世の陶磁器片数点と古銭が出土しているが、上記の推測が正しければ上流（北）から流れ込んだものとも考えられ、城の北側に館跡等があった可能性も考えられよう。前述のクランク状の道や城北東に残っていた対屋敷という地名などとともに検討が必要である。



写真21 平成14年度調査区全景



写真22 礫出土状況

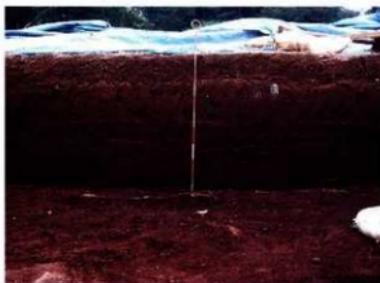


写真23 青磁片出土状況

平成15年度（写真24・25）

谷戸城のガイダンス施設建設予定地において事前調査として実施した。平成10年度に空堀を確認した調査地点の北に隣接する土地である。調査の結果、平安時代の住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、溝2条、土坑32基と平成10年度調査で出土した薬研堀の一部を確認した。

平安時代の住居跡は出土遺物の特徴から9世紀後半と考えられる。掘立柱建物跡は2間×2間のもの1棟、1間×2間のもの1棟が隣接して発見された。柱穴から土師器が出土していることから平安時代のもと考えられる。1号溝は調査区の西側に南北に掘られたもので、覆土の観察から水路として使われていたと考えられる。2号溝は空堀の近くで確認された浅い窪みで幅も約10cmと細い。ほぼ直角に曲がっているようにも見え、空堀にも近いことから城に関連する遺構とも考えられるが、詳細は不明である。

空堀は、薬研堀の北側の法面が現れたもので、確認面から150cmの深さまで検出した。勾配は約35°で一定している。遺物の出土はなかった。



写真24 平成15年度調査区全景(上が北)



写真25 薬研堀検出状況

これまでの調査結果をまとめると、谷戸城の北側は南北方向の広く浅い沢のような地形であり、川といえるほどではないが水の流れがあったと考えられる。また、青磁片の出土はこの付近に館や集落があったことを推測させるが、そのような遺構は確認できていない（平成14年度調査）。谷戸城の築かれた城山の裾を巡る空堀（平成10年度調査）は谷戸城の城域を区画するものであり、その出入口口となる部分を見発できた成果は大きい。しかし、更に外側を巡る空堀が存在する可能性も完全に否定できない。

南側は、近世の田圃請によってかなり削られているが、中世とみられる遺構は地下式土壌しかない。今回の調査区の南には館跡と考えられる方形地割りがあり、その南の城下遺跡では11世紀の白磁片が出土している。この地割りは今回の調査区のある尾根の突端に位置することから、この尾根は館と城を繋ぐ重要な部分であり、城内の一部であったと考えることもできる。北側の空堀の側からは、南にも大規模な空堀の存在が想定でき、より大きな視点から城域を考える必要がある。

第5章 平成16年度谷戸城周辺地中探査レーダー調査報告

テラ・インフォメーション・エンジニアリング

平成16年度事業として、谷戸城周辺の地中探査レーダー調査を実施した。今年度は城域の確認のため、周辺の道路上を仮範囲に調査して主に空堀状地形のデータ収集を行った（第11図）。

第12図は今回の調査で、何らかの窪んだ地形の確認された地点を平面図上に落したものである。この図にこれまでの調査結果、地籍図の状況、現地地形などを加味して地下の地形を推測したものが第13図となる。以下、代表的な地形データについて説明を加える（アルファベットは図中に赤字で記入されたものと対応する）。

- A - 南北に存在する大型の堀とみられる。（位置からは西衣川の旧河道である可能性もある）
- B - 谷戸城を直接外周する大型の堀とみられる。細かい繋ぎの線は推測である。（平成10年度の周辺調査と13年度の史跡内調査で空堀を確認している）
- C - Bの堀の内側では、最も規模の大きい堀とみられる。（史跡内は調査を行い、空堀であることを確認している）
- D - 一図中では空堀Bからの延長を想定しているが、その他の堀状データ（C・I・E）と繋がる可能性もあり、特定はできない。
- E - 旧河川（東衣川の旧河道）のようにもみられるが、Fと繋がる堀の可能性もある。
- G・H - 東西の堀である。県道長沢・小瀬沢線までの間に同様の規模のものが数本あるとみられる。（Hについては、平成14年度の周辺調査で埋らしい遺構は確認できなかった）
- I - 南北にある堀で、これが現在の南に下る沢の原型の可能性がある。

※（ ）内は編集者が加えた

また、第11図に示すとおり大泉郵便局の南に谷戸城の北側を区画するような東西の大きい堀（記号J）が存在する可能性があり、安楽寺東側で確認された沢（記号K）が城の西を区画していた可能性がある。



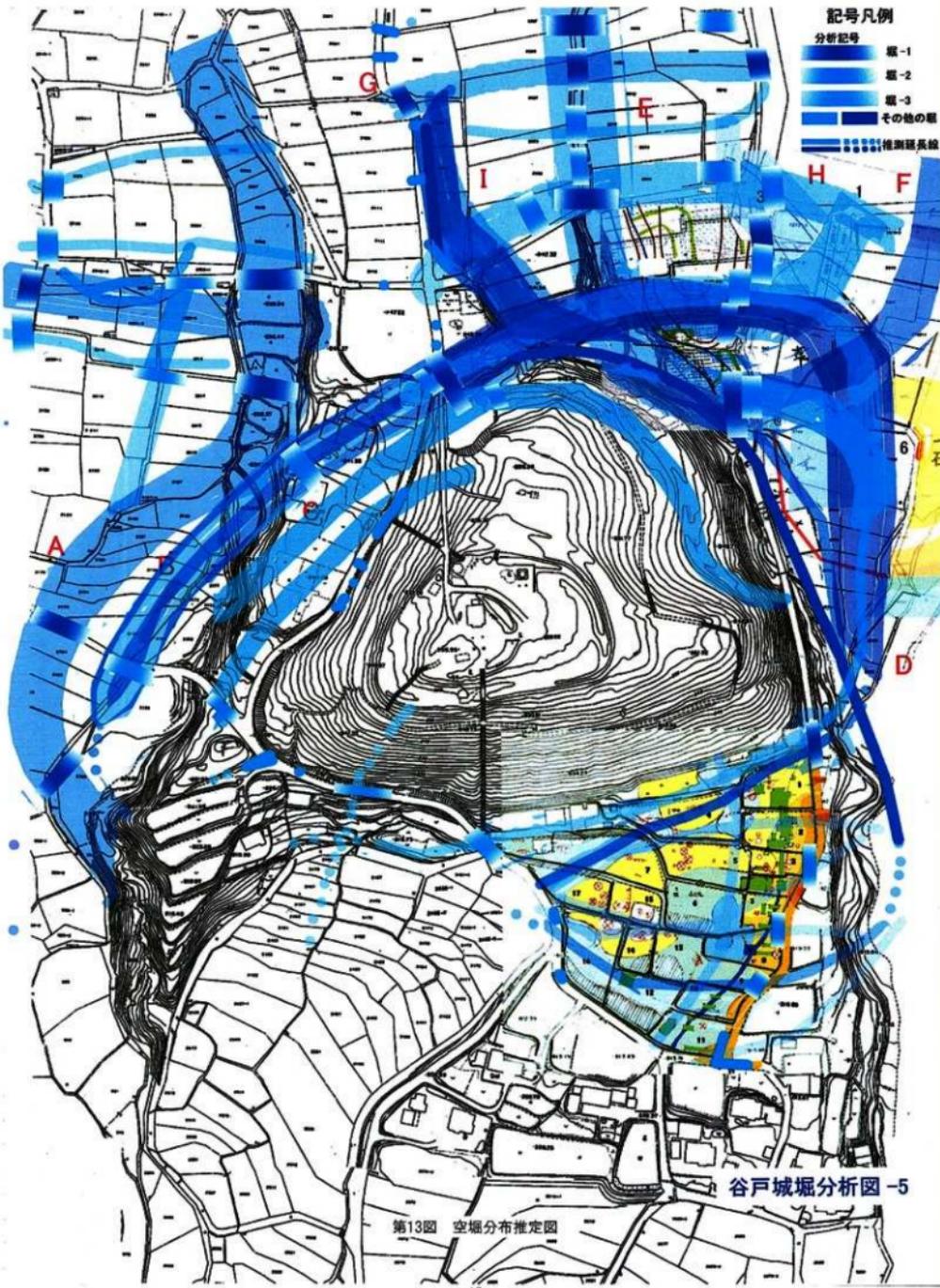
第11図 地中探査レーダー調査範囲



第12図 窪地データ収集地点

記号凡例

- 分析記号
- 層-1
 - 層-2
 - 層-3
 - その他の層
 - 推測延長線



谷戸城堀分析図-5

第13図 空堀分布推定図

調査組織

調査主体 平成16年4月1日～平成16年10月31日 大泉村教育委員会

平成16年11月1日～平成17年3月31日 北杜市教育委員会

調査機関 平成16年4月1日～平成16年10月31日 大泉村教育委員会

平成16年11月1日～平成17年3月31日 北杜市教育委員会

事務局 教育長 浅川 修次 (～平成16年10月31日 大泉村教育委員会)

藤巻 宣夫 (平成16年11月1日～12月10日 北杜市教育委員会)

小清水淳三 (平成16年12月11日～)

課長 原 かつみ (平成16年4月1日～平成16年10月31日 大泉村教育委員会)

伏見 武仁 (平成16年11月1日～ 北杜市教育委員会)

調査担当者 主事 渡邊 泰彦 (元大泉村教育委員会、現北杜市教育委員会生涯学習課)

調査参加者 浅川達子・浅川久代・浅川日出子・浅川朋子・浅川瀧江・津布久功二・藤原祖乃子・

藤森里美・細田絹代・三井種子・三井はな江

報告書抄録

書名	史跡谷戸城跡	
副題	平成16年度 環境整備事業に伴う発掘調査概報	
巻次	Ⅶ	
シリーズ・番号	北杜市埋蔵文化財調査報告 第7集	
編著者名	渡邊泰彦	
編集・発行機関	北杜市教育委員会	
連絡先	〒408-0188 山梨県北杜市須玉町大豆生田961-1 TEL0551-42-1373	
印刷所	峽北印刷株式会社	
発行日	平成17年3月31日	
<small>しせつたにしろ</small> 史跡谷戸城跡	ふりがな	やまなしけん ほくとし おおいずみちょう やと あざじょうやま
	遺跡所在地	山梨県北杜市大泉町谷戸字城山
	市町村コード	192091
	地形図	1:50,000 八ヶ岳・韮崎
	位置及び標高	北緯35°51'15" 東経138°23'20" 頂上862m
	主な時代	縄文時代・中世
	主な遺構	土塁・空堀
	主な遺物	かわらけ・古銭・縄文土器・石器・黒曜石
	特殊遺構・遺物	
	調査期間	2004年11月19日～2004年12月24日

